



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴリ遠征譚(承前)
Author(s)	木村, 彰一; KIMURA, Shoichi
Citation	スラヴ研究, 24, 11-20
Issue Date	1979-07
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5087">https://hdl.handle.net/2115/5087</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00002586869.pdf



# イーゴリ遠征譚

(承 前)

木 村 彰 一 訳

167. 槍はドナウの岸辺に歌う。

168. ヤロスラーヴナの声がする。かっこうのように、朝早く、名も知れぬ国へと呼んでいるのだ。

167. 「槍はドナウの岸辺に歌う」——J Копія поють на Дунаи. PA ともに、166 末尾の語 *пашуть* のあとにコンマを置き、直接 *копія* につなげていますが、J (Obrębska-Jabłońska, 107 も同じ) は、Копія 以下を新しい 1 文として独立させています。ただし La Geste はこの 1 文を 168 以下のいわゆる《Jaroslavna のなげき》の部分の冒頭に置いています。Jakobson の (XII 世紀のテキストの) 1964 年の reconstruction (たとえば T. Čiževska, *op. cit.*, p. 390 以下参照) では、たび重なる諸公の内訌によって国家としての統一の基礎が危うくなったロシアの現状を憂える J 164-166 のすぐあとに移しており、この方がより妥当でありましょう。なぜなら《槍はドナウの岸辺に歌う》という一文は、J 166 の《(リューリクとダヴィトの) 旗さきは敵と味方にわかれてなびく》と対比されていて、後者が《内憂》を意味するなら、前者はドナウ河下流地域の当時のロシアの辺境における《外患》を指すものと考えられるわけです。M. Szeftel (La Geste, 142 以下) が指摘するように、*polovcy* はロシア諸公の内訌に乗じてすでに XII 世紀中葉以来ドナウ地域に達していましたし、また Igor' 敗戦の直前には、*bolgary* の反乱や、*polovcy* の侵入に悩むビザンティン帝国からの脅威を脱した、ロシアの西方の敵ハンガリーの動きが活発化しはじめていました。作者が Igor' 敗戦後における西方の辺境ないしハンガリーのこうした情勢にも心を配っていたことは、J 105 の貴族たちの言葉にある《大いなる擾乱は遠くフンの地に及んでおります (великое буйство подасть Хинови)》という句や、J 130 の《八念の君》ヤロスラーフに対する呼び掛けの中の《くろがねの精兵もてハンガリーの山をばささえ (подперь горы Угорьскыи своими жедъзными плъки), 王のゆくてをさえぎりとどめ (заступивь королеви путь), ドナウの河の門をばとざし (затворивь Дунаю ворота), 雲のかなたに石をばはなち (меча камены чрезь облакы)》という句からもあきらかに読み取ることができます。

なお、*копія поють* という表現は、Lihačev, 461 および Nahtigal, 90 が推測するように、《戦闘が行なわれている》という意味でしょう。J 30 *крычатъ тѣдѣгы*, J 50 *стязи глаголютъ* を参照。

Lihačev, 26 および Nahtigal, 54 は *на Дунаи* を *копія поють* と切り離して次の J 168 の *Ярославны* にはじまる文につづけ、さらに Nahtigal, 90 は *Дунаи* はここでは特定の河を指すのではなく一般に《河》を意味していると言いますが、もし *на Дунаи* が上に述べたような *implication* を持つとする見方が正しいとすれば、このような解釈は当然受け入れることができないわけです。なお J 212 *Дѣвици поють на Дунаи* を参照。

168. 「ヤロスラーヴナの声がする」——J *Ярославны м(и) (Р Ярославнынъ А Ярославнымъ) ся (PA なし) глась слышитъ (Р слышитъ)*: J 168-J 183 はこの作品中とくに有名な《Jaroslavna のなげき》の 1 節です。Jaroslavna は主人公 Igor' の妻で本名 *Evfrosinija*, J 130 に出る *Galič* の《八念の君 (Osmomyslъ)》Jaroslav Vladimirovič の娘に当たります。

「かっこうのように」——J *зегзицею зегъзиця*《かっこう》はこの形では古代ロシアの文献中 Slovo, J 168, 169 の 2 個所に現われるだけです。これによく似たさまざまな語形が、古代ロシアの文献や、現代ロシア方言、さらに他のスラヴ語、バルト語などに見出されます。M. Vasmer, *op. cit.*, I, 451 参照。

「名も知れぬ国へと呼んでいるのだ」——J *незнаемъ (PA незнаемъ) [...] кычетъ* La Geste は PA の *незнаемъ* を副詞形 *незнаемъ* に訂正し、これを Grégoire は “dans son angoisse”, Cross は “without tidings” と訳していますが、*незнаемъ* は《知られずに、人知れず》という意味にしかならないはずですし、それに Jaroslavna は J 170 以下が語るように敗戦の模様については細部の点 (たとえばロシア軍が水の不足に悩んだこと——J 183 の注参照) に至るまでよく知っているのですから、

169. 《わたくしは、一羽のかっこうとなって、ドナウの河を飛んでいこう。  
 170. 《海狸の袖を、カヤルイーの流れに浸して、  
 171. 《わが殿がたくましいからだにお受けあそばした、血を吹く傷をぬぐって上げよう》  
 172. ヤロスラーヴナは朝早く、プチャーヴリの城のはざまに泣きつつ言う。  
 173. 《風よ、風の君よ！ わが君よ、そなたはなぜ、そのようにむごく吹きますのか？  
 174. 《そなたはなぜ、フンの矢を、つれないそなたの翼にのせて、わが背子のつわものどもに射かけますのか？》  
 175. 《青海原を行く船をあやしつつ、空高く、雲の下を吹くだけでは足りぬと言いま

両者の訳は少々見当違いのようです。拙訳は上に引いた Jakobson の 1964 年の reconstruction の *земли незнаемъ [...] кычеть* によったものですが、このように *незнаемъ* の前に *земли* をおぎなう読み方を提唱したのは、Ihor Ševčenko, “To the Unknown Land”: A Proposed Emendation of the Text of the Igor’ Tale”, *Word*, VIII (1952), 356-359 で、Jakobson の reconstruction もこれを受け入れたものと思われます。この論文は、《名も知れぬ国》ないし《名も知れぬひろ野》という表現が周知のごとく *Slovo* のみならず年代記においても *Половецкая степь* と意味することがある事実に注目し (*Slovo* の例は J 29 *земли незнаемъ*, 67 *въ полъ незнаемъ*, 128 *на полъ незнаемъ*), J 168 においてももともと *з (емли) незнаемъ* とあったのに略字の *з* が見おとされた結果、意味不明となった *незнаемъ* が *незнаемъ* として残ったものと推定しており、論旨は明快、かつきわめて説得力に富んでいます。なお Buslaev (1861) 以来諸家が提出してきたさまざまな他の読み方についてもこの論文を参照のこと。

169. 「ドナウの河を」——J по Донови (РА Дунаеви) Jakobson の 1964 年の reconstruction では по Донови (or Дунаеви) となっていて、2 様の可能性が暗示されています。拙訳は РА によりました。La Geste 94 は、Донови は Дунаеви と語形が似ているための書き誤りだろうと推定していますが、J 167 への注のさいごにあげたいいわゆる generic term としての Дунаи の用法にかんする Nahtigal の指摘の妥当するばあいもあることはたしかで、現に Stelieckij, 196 は P. N. Rybnikov の《Песни собранные》から次のような 1 節を引いています：Протекала Дунай-река/Ко городу ко Киеву。

172. 「プチャーヴリの城のはざまに」——J въ Путивлѣ на забралѣ Putivl’ は Igor’ の長子 Vladimir の居城のあった町 (Игорь [...] поймя со собою [...] Володимѣра сына своего ис Путивля [...] ——年代記 Ipatij 本 1185 年の頃) で、Novgorod-Severskij の南にあり、Dnepr の左の支流 Desna の左の支流 Sejm にのぞんでいます。Jasoslavna は夫の敗戦後、おそらくは守りがより堅固だったため、Novgorod-Severskij からここへ移ってきていたものと見えます。なお Putivl’ 公国が Igor’ 敗戦直後 Къза のひきいる polovcy の一隊の攻撃を受けたことについては、年代記 Ipatij 本、1185 の次の記事を参照：А друзии половцѣ идоша по онои сторонѣ к Путивлю, Кза у силахъ тяжькихъ, и повоевавши волости ихъ и села ихъ пожгоша, пожгоша же и острогъ (外廓) у Путивля и возвратишася восвосяи。

173. 「風よ、風の君よ！」——J О вѣтрѣ (А вѣтре), (P!) вѣтрило! вѣтрило は вѣтръ のいわゆる表愛語 (Kosenamen)。W. Vondrák, Vergleichende Slavische Grammatik<sup>2</sup>, I, 573 は《固有名詞としても使用される》この種の表愛名詞の例としてセルビア語 Bratilo, Mužilo, Stanilo をあげ、T. Číževska, *op. cit.*, 112 には、古代ロシア語の例として Будило, Добрило, Жеребило, Свѣтило, Старожило をあげています。

174. 「フンの矢を、そなたのつれない翼にのせて」——J Хиновъскыя (А Хиновъскыя) стрѣлки на своєю нетрудною (РА не трудною) крилицю [Loc. du.!] Хыновъскый は Хынъ の形容詞、Хынъ は J 105 の注で述べたように *Slovo* ではハンガリー人を指しますが、M. Szeftel (La Geste, 143 以下) によれば、そのハンガリー人の矢は、三つ羽根のある *avary* の矢と違って、形が単純で、同じ平面に羽根がふたつしかついていず、そのために比較的軽かったといえます。

形容詞 *нетрудный* は Sreznevskij, II, 434 に лёгкий とあり、これを踏襲する訳も多いのですが、拙訳は Jakobson の беспечный, Grégoire の indifférent, Obrębska-Jabłońska の beztroski などによりました。

すのか？

176. 《かが君よ、そなたはなぜ、わがよろこびを、荒れ野の草一面に吹き散らしました？》

177. ヤロスラーヴナは朝早く、プチャーヴリの城のはざまに泣きつつ言う。

178. 《名高いドネープルよ、そなたは岩山をあまたつらぬき、ポーロヴェツの地を流れたではありませんか。

179. 《そなたはスヴァトスラーフ殿の軍船を、流れにのせてあやしつつ、コビャークの陣へとはこんだではありませんか。

180. 《わが君よ、わが背子をあやしつつ、わたくしにもどして下さりませ。さすればわたくしは、朝早く、わが背子のいます海へ涙を流さずともすみませぬものを》

181. ヤロスラーヴナは朝早く、プチャーヴリの城のはざまに泣きつつ言う。

182. 《あかるい日よ、照りわたる日影よ！もろ人をあたためる、みめうるわしいそなた。

183. 《わが君よ、そなたはなぜ、わが背子のつわものどもに、焼きつく光を注ぎました？ 水涸れのひろ野のさなか、弓弦を渴きにたわめ、えびらを愁いとぎしました？》

184. 夜半のころ、海はしぶき、竜巻きは狭霧となって迫り来る。神はイーゴリ公に、

178. 「名高いドネープルよ！」——J О Днепре Словутицю (А дне пресловутицю)! (A ?) Словутичь は Sreznevskij, III, 421 には славный, знаменитый (сын словута, т. е. славного) とあり, M. Vasmer, *op. cit.*, II, 662 には Epitheton des Dnepr, [...] Ableitung von \*slovotъ 'berühmt' [...] とあります。M. Szeftel (La Geste, 144) によれば Slavutič, Slavuta という Dnepr の épithète がこんにちに至るまでウクライナの folklore に用いられています。彼がフランス語訳で例にあげている XVII 世紀のウクライナの歌の 1 節を Stelleckij, 200 によって引けば次のとおりです: *Тоді козаки [...] / К Дніпру-Славути низенько укланяли: / «Хвалим тя, господи, и благодарим!»* 他の例については T. Čiževska, *op. cit.*, 319 参照。

179. 「そなたは [...] はこんだではありませんか」——J Ты лелѣяль еси на себѣ Святославлі (А Свято славлі) носады до плъку (А полку) Кобякова. (PA:) この 1 文は、1183 年 7 月、Kiev の公 Svjatoslav Vsevolodovič が他の諸公とともに polovcy と戦ってこれをやぶり、Kobjak 汗を捕虜とした事件への allusion です。J 89, およびその注を参照。

183. 「焼きつく光を注ぎました？」——J (=PA) простре горячую свою лучю луча は、Sreznevskij, II, 56 に radius, луч とあり、多数の用例があがっています。

183. 「水涸れのひろ野のさなか、弓弦をかわきにたわめ、えびらを愁いとぎしました？」——J въ полѣ безводнѣ жаждю имъ лучи съпряж(и) (P съпряже, А съ пряже), (P なし) тугою имъ тули затче? (PA .) La Geste, 94 は、動詞 съпрячи は “unir, conjuguer” の意味しかないという理由で、P の съпряже (aorist 形) を съпряжи (<съпряжити “sécher au feu”) に改めたと言っていますが、その必要はありますまい。Sreznevskij, III, 809 には съпрячи の訳語として最初に стянуть, согнуть とあり、げんに Jakobson 自身も 1864 年の reconstruction では P と同じ съпряже という形を採用しています。

J 183 と、年代記 Lavrentij 本 1186 年の項の次の個所との間に、内容ならびに用語の点で注目すべき一致が見られることは、La Geste 144, Lixačev, 462, Nahtigal, 94 などの指摘するのとおりです: *изнемогли бо ся бяху безводьемъ [Slovo では въ полѣ безводнѣ], и кони и сами, въ знои [Slovo では太陽にかんして простре горячую свою лучю] и въ тузѣ [Slovo では тугою имъ тули затче], и поступиша мало к водѣ, по 3 дни бо не пустили бяху ихъ к водѣ.*

184. 「竜巻きは狭霧となって迫り来る。神はイーゴリ公に [...] 示したもう」——J идуть (P идуть) сморци: (PA なし) мъглами (PA;) Игореві князю Богъ [...] кажетъ J は сморци のあとに: をおき、мъглами を次の文の述語 кажетъ の状況語と解しており、Obrębska-Jabłońska, 107 もこの

ポーロヴェツの国を逃れて、ロシアの国の、父祖の黄金の玉座へ帰る道をば示したもう。

185. 夕映えの光は消えた。イーゴリは眠る。いな、イーゴリは目覚めてある。イーゴリは胸のうちに、大ドンよりドネーツに至る野の道の長さを測る。

186. 夜半のころ、ヴルールは馬を曳き、河のあなたより、ひと声高く呼子の笛を吹き

読み方を踏襲していますが、拙訳は *идуть сморци мъглами* がその前の *прысну море полуночи* (夜半のころ、海はしぶき) と対句をなしているものと見て、PA の句読法に従いました。このように読んでも、神が霧によつて Igor' に逃走の決意をうながした、ないしは助けた、という作者の implication にかわりはないわけです。J 190 では、Igor' はまさしく《霧の下を》(*подъ мъглами*) 走る事になっています。

185. 「夕映えの光は消えた」——J *Погасоша вечеру зари: Igor'* の脱出の夜の描写。J 187 まで続くこの描写は、きわめて簡潔ながら、次に引く年代記 *Ipatij* 本 1185 年の項の記事 (以下 *Ip.* と省略) と細部の点まで合致しています。 *не бяшетъ бо ему лъѣ бѣжати в день и в ночь, имъже сторожевѣ стережахуть его, но токмо и веремя таково обрѣтъ в заходъ солнца.* なお Igor' が *polovecy* の障害を脱出してロシアへ帰った時期については (*Ip.* には記載が見当たりませんが)、N. K. Gudzij (*История древней русской литературы*, изд. 5-ое, М., 1953, стр. 136) は、敗戦と同じ年の 1185 年と考えています。

「イーゴリは眠る。いな、イーゴリは目覚めてある」——J *Игорь спить (P спить), Игорь бдить (P бдить)* 原文は《イーゴリは眠っていたり目覚めていたりする》という意味に取れないこともありませんが、*Ip.* によれば、番人たちが *kumys* の酒盛りに打ち興じつつ、Igor' が眠っているものと思ひこんでいた (*а князя творяхуть спяща*)、そのすきに Igor' は幕をかかげてそとへ出た (*подойма стѣну и лѣзе вонъ*) ことになっていますので、拙訳は《眠っていると見せてじつは目覚めている》の意味に取りました。

186. この個所に *Овлуръ* (191 では *Влуръ*) という人名が出てきますが、これは *Ip.* では *Lavor* (与格 *Lavrovi*) と呼ばれる *polovec* (身分不詳で) で、この人物が Igor' を助けてともにロシアへ脱走をしたことになっています。2人があらかじめ立てておいた脱走の計画にもとづき、Igor' は脱走の夜、*Lavor* のもとへ自分の馬丁頭 (*конюший*) をやって、《*перееди на ону сторону Тора с конемъ поводнымъ* (替え馬)》と言わせました。さて、番人たちが *kumys* に酔いしれたころ、馬丁頭が Igor' のところへ来て、*Lavor* が彼を待っていると告げました。このあと Igor' が幕をかかげてそとへ出たことは、J 185 の註に引いたとおりです。

「夜半のころ、ヴルールは馬を曳き、河のあなたよりひと声高く呼子の笛を吹き鳴らす」——J *Комонь явъ (PA въ), (PA なし) полуночи (P.) Овлуръ свисну за рѣкою (A зарѣкою): (PA ;) Lixačev* は A をそのまま採用して *Коня в полночь Овлур [...] свистнул за рекою* と訳し、*Nahtigal* も同じく A を採用して、*Kot konj je Ovlur o polnoči zarezgetal za reko* (馬のように、Ovlur は、真夜中ごろ、河の向こうでいなないた) と訳し、*Obrębska-Jabłońska* は P を採用して、*Koń [gotów] o północy, świsnął Ovlur za rzeką* と訳していますが、いずれもかなり無理があるようです。J の emendation は、*въ* の前に *я* 1 字を挿入するだけです。前置詞なしの *ночь* の *Loc. sg.* はすぐ上の 184 にも (教会スラヴ語形ではありますが) *полуночи* の例がありますし、それに何よりも河向こうでの替え馬の準備という 1 点で上に引いた *Ip.* の記事と符合しますので、拙訳はこれによりました。ただし *Slovo* では *Lavor* は *Ip.* の記事とは違い、馬の準備のできたことを呼ぶ子の笛で Igor' に知らせることになっていますが、これは *Slovo* 一流の詩的潤色でありましょう。

「これぞすなわち、イーゴリ公は虜囚の身に終るべきにあらずとの、公への合図！」——J *велить князю разумѣти* —— (*PA .)* *князю Игорю не быть (A небыть) (PA :) клѣщену (PA кликну)!* (*PA* なし) *велить князю разумѣти* については J 29 *велить послушати земли незнаемѣ* (知られざる国へと合図をおくる) を参照。多くの注釈家 (例えば *Lixačev*, *Nahtigal*, *Stelleckij*, *Obrębska-Jabłońska*) は *PA* のキキストどおり *кликну* を独立させて、《彼は (大声で) 呼びかけた》ないし《叫んだ》の意味を取っていますが、そうすると前の *князю Игорю не быть* の意味がはっきりしなくなりますし、(《Igor' 公はそこにとどまるべきでない》という意味の諸家の訳はどう見ても、不自然です)、*Lavor* が Igor' の番人たちに気づかれる危険を無視して《呼びかけた》り《叫んだ》りするものも不自然のような気がしますので、*кликну* は不定形 *не быть* の意味を補うなんらかの名詞ないし形容詞の *Dat. sg.* 形のくずれた形と考えた方がよさそうに思います。*La Geste* では上に示したように *не быть клѣщену* となっていますが、*Jakobson* は 1864 年の reconstruction では *клѣщену*

鳴らす。これぞすなわち、イーゴリ公は虜囚の身に終るべきにあらずとの、公への合図！

187. 地はとよみ、草はざわめき、ポーロヴェツの幕舎は動いた。

188. イーゴリ公、葦原さして、貂のごと身を躍らせ、白鴨のごと水に泛んだ。

189. 駿馬の背に跳び移ったと見てあれば、灰色おおかみさながら、ひらりと馬を乗り捨てて、

190. ドネーツの岸辺をさしてひた走る。狭霧の下を、鷹のごとくに翔りつつ、朝餉にも、昼餉にも、また夕餉にも、雁、白鳥を射て落とす。

191. イーゴリが鷹のごとくに翔り行けば、ヴルールは、凍れる露を払いつつ、おおかみさながらひた走る。ふたりながら、さしもの駿馬を疲らせたのだ。

192. ドネーツ言う。

を *кладьнику* <or *колодьнику*> に変更しており、拙訳はこれによりました。Ip. によれば、Lavor が Igor' に脱走をすすめた時、Igor' は彼を信用せず、千人長の息子 (*тысячкогo сынъ*) や馬丁頭が同じことをすすめた時も決定をためらっていましたが、側近の者たち (*думци*) から、*polovcy* が不首尾に終わった *Perejaslavl'* 遠征から帰ったあかつきには、彼らは Igor' をも含めてロシアの捕虜を全部殺す手筈になっているという噂を聞くに及んで、Igor' は彼らの帰還を恐れ (*уполошася приѣзда ихъ*) 脱走を決意するに至った (*возиска бѣжати*) のでした。Jakobson は Ip. のこのような記事を念頭において元来略字で書かれていたとおぼしい *АР кликну* を *кладьнику* へに替えたものと思われまゝ (*La Geste*, 95 参照)。もしこの *emendation* が正しいとするなら、Igor' にはじめて脱走をすすめてきき入れられなかった Lavor は、この夜、呼ぶ子の笛の合図によって、Igor' の最後の決意をうながしているわけです。

J 187 は *Stelleckij*, 203 以下の言うように、Igor' の脱走が発見された後の、*polovcy* 陣営内の周章狼狽ぶりを描写しています。

188. 「イーゴリ公、葦原さして [...] 身をおどらせ、白鴨のごと水に泛んだ」——*Игорь князь поскочи (А по скачи) [...] къ тростию (РА ,) и бѣлымъ гоголемъ на воду (А наводу). (РА ;)* Ip. の次の記事を参照: *Сий же пришедъ ко рѣцѣ и перебредъ [...]*.

189. 「駿馬の背に跳び移ったと見てあれば、灰色おおかみさながら、ひらりと馬を乗り捨てて」——*И въврѣжеся (А въ вер жеся) на брѣзъ (А борзъ) комонь (РА .) и скочи съ него босымъ (А босы (м?)) вълкомъ (А волкомъ). (РА ,)* Ip. の次の記事を参照: *и всѣде на конь: и тако поидоста сквозѣ вежа. Се же избавление створи господь в пятокъ, в вечерѣ.*

「灰色おおかみ」と訳した *босии вълкъ* については、*Vasmer, op. cit.*, I. 111-112 は、*turkotat. boz kurd* から出た表現であるという *Gordlevskij* の説をあげ、元来は 'heiliger Wolf'、現在では 'grauer Wolf' を意味する、としています。*Obrejska-Jabłońska*, 146 は "oznacza wilka o białych łapach" と断じています。

190. 「ドネーツの岸辺をさしてひた走る」——*И (=РА) И потече къ лугу Донца, лугъ* は《*низменное место*》(*Sreznevskij*, II, 49) ですが、この場合は《*низменный берег*》を指します (*Stelleckij*, 204 参照)。なお Igor' と Lavor とは、Ip. によれば (おそらくは *Donec* の河沿いに) 歩きつづけ (*пѣшь*)、11日を費して *Donec* の町にたどりついたことになっています。(2人が馬に乗らずに歩いたのは、*Slovo*, J 191 によれば途中で馬を乗り疲らせた *[прегрѣгоста]* ためです。) *Donec* の町は *Donec* の右の支流 *Udy* 河の右岸、現在の *Har'kov* から7キロばかり離れた地点に遺跡が残っている由です (*La Geste*, 145, *Stelleckij*, 204 参照)。

「狭霧の下を、鷹のごとくに翔りつつ [...] 雁、白鳥を射て落とす」——*И и полѣтъ соколомъ подъ мглами (А мглами), (РАなし) избивая (А из бивая) гуси и лебеди [...]* *Stelleckij*, 204 は《*Волх Всеславович*》の *bylina* から次のような個所を引いています: *Он обернется ясным соколом,/Полетел он далече на сине море,/А бьет он гусей, белых лебедей,/А и серым малым уткам спуску нет.* なお J 79 「ああ! はるけくも鷹は飛びしよ、むら鳥をほふりつつ、——かの海さして!」(*О! далече зайде соколъ, птичь бя, —къ морю!*) の *пѣтичь* も、食用の小鳥であったことが J 190 との比較によって明らかです。

193. 《イーゴリ公よ！ おんみに大いなる榮えあり，コンチャークに大いなる恨みあり，ロシアの国に大いなるよろこびあり！》

194. イーゴリ言う。

195. 《ドネーツよ！ そなたにこそ大いなる榮えはあろう。波間にのせてこの公をあやし，しろがねのそなたの岸に青草をしき，緑なす木々の下陰，あたたかい霧の衣につつんでくれたはそなた！

196. 《水にゆれる鴨により，流れに泛ぶかもめにより，風に舞う黒鴨によって，この公を守ってくれたはそなた！》

197. また曰く——ストグナ河はこれとうらはら。流れ乏しきあの河は，かかわりも

195. 「しろがねのそなたの岸に」——J на своихъ (А насвои (x?)) сребреныхъ (А сребренныхъ) брезѣхъ Donec の河水は白亜を多量に含んでいるため，白亜の堆積した浅瀬や砂州は日が当たると銀色に見えると云います (Lixačev, 463 の引く N. V. Šarleman' の説)。

196. 「水にゆれる鴨により，流れに泛ぶかもめにより，風に舞う黒鴨によって」——J гоголемъ на водѣ (А наводѣ), чайцами на струяхъ, чрънядьми на ветрѣхъ (А навѣтрѣхъ) [...] ここにあげられている水鳥がどのような鳥であれ (чяица, чрънядь については T. Čiževska, *op. cit.*, 382, 380; Obrębska-Jabłońska, 146 を参照)，用心深さがこれらに共通する特徴であることは疑いありません。つまり作者は，Donec 河の岸辺に生息するこれらの鳥が，追手が近づく度に一齐に飛び立って，Igor' たちに警告を与えたことを言いたいのです。

197. 「また曰く——ストグナ河はこれとうらはら」——J не тако (А нетако) ти (РА ли) (РА,) рече (РА,) рѣка Стугна: (РАなし) Stugna は Dnepr の右の支流。Kiev の下流で Dnepr に注いでいます。Obrębska-Jabłońska, 147 は Перетц を引いて底の浅い泥深い河だと言います。La Geste は рече の主語を рѣка Стугна と考え，РА で рече の前後にあるコンマを取りはらった上で，例えば Jakobson は Нет, таких вам речей не вела река Стугна と訳しています。この場合 такие речи にあたるものは J 193 の Igor' に対する Donec の祝福の言葉にほかなりませんが，この言葉は J 197 のすぐ上に来る Igor' 自身の Donec に対するかなり長い感謝の言葉によって J 197 と引き離されていますから，この解釈は少々無理ではないでしょうか。拙訳は рече の主語を Igor' と解し，РА のふたつのコンマを生かした Lixačev, 100 や Nahtigal, 93 の読み方を踏襲しました。なお私見によれば，J 197 の рече は，J 4 の рече (Р речь А рѣчь ただし諸家おおむね一致して рече と読みかえています) と同じく，全文が西欧の修辞学にいわゆる erlebte Rede の一種であることを示しているのかもしれませんが。この考え方が正しいとすれば，例えば J 197 においては，作者は Igor' に対する Donec のあたたかな配慮を Igor' 自身の口をとおして描写したのち，それとは打ってかわった Stugna の非情なふるまいについての同じく Igor' の言葉を，рече は残しながら，じつは地の文の形で提示しているわけです。

なお РА не тако ли の не тако ти への変更は古くから提唱されているもので，Lixačev, Obrębska-Jabłońska などにもこれに従っています。(Sreznevskij, III, 957 には Тако ти суть отъмстыя злымъ дѣлателемъ という文例が引かれています。) ついでながらこの dativus ethicus も，J 197 が erlebte Rede の手法によっていることを示しているように筆者には思われます。

「かかわりもなき小川や流れをあまた呑んだのみか」——J пожръши (А пожръ ши) чужи ручьи (РА,) и стругы, (РАなし) стругы は струга (Sreznevskij, III, 558, 《струя, течение》) の Acc. pl. 形。Lixačev, 100 および N. K. Gudzij (Слово о полку Игореве. М., 1955, стр. 44) は ладьи と訳していますが，これは стругы を Р の訳と同じく стругъ (Sreznevskij, III, 559, 《струг, скобель》) の Acc. pl. と解したものと思われます。自分は水が乏しいので，ほかの (чужи) 河からの借りもの水で腹をこやしているというユーモラスな悪口，という文脈の中では，不適當といわざるを得ません。

「若き公ロスチラーフを，茂みの間に押しつけて」——J ростре на кусту (РА?) уношу князя Ростислава (РА князю Ростиславу), (РАなし) 背景をなす史実については，年代記 Lavrentij 本 1093 年の頃 (除村訳では 165 以下) を参照。Rostislav は，Rostislav Vsevolodovič, Vladimir Monomax の弟，Perejaslavl' の公。1093 年春，Vladimir およびいとこの Svjatopolk Izjavslavič とともに《はなはだしく増水していた》(Бѣ бо наводнилася велми) Stugna を越えて polovcy

なき小川や流れをあまた呑んだのみか、若き公ロスチスラーフを、茂みの間に押しつけて、ほの暗い岸边に近い水底にとりこめた。

198. ロスチスラーフの母君は、若き公ロスチスラーフをしのんで泣く。

199. 花々は愁いにしおれ、木々は悲しんで大地に低く枝を垂れた。

200. あの物音は、かささぎの鳴く声ならず、グザーと、コンチャークと、イーゴリを求めてこなたかなたへ馬を駆る音。

201. その時、大鶉も鳴かず、小鶉も鳴りを静め、かささぎもさえずりをとめた。

202. ただ啄木のみ、柳の枝を伝いつつ、くちばしの音高らかに、河への道を教え、夜うぐいすはたのしげに歌って、夜明けを告げる。

と戦いましたが、敗れて兄とともに逃げる途中、Stugna 河で溺死しました。その模様は原文では次のとおりです：и прибѣгоша к рѣцѣ Стугнѣ, и вбрѣде Володимеръ с Ростиславомъ, и нача утапати Ростиславъ пред очима Володимерима. И хотѣ похватити брата своего и мало не утопе самъ. И утопе Ростиславъ, сынъ Всеволожъ. Володимеръ же пребредъ рѣку [...] なお、Rostislav はこのときわずか 22 歳でした。

J (=PA) *ростре* は Jakobson (La Geste, 243) のように *ростерети* (教会スラヴ語形 *растрѣти*) = *écraser* (押しつぶす) の aorist と取るのがいちばん無難でありましょう (なお Sreznevskij, III, 172, *рострѣти* 《затереть》を参照)。J (=PA) *на кусту* (Loc. du.) の訳も、かりに Jakobson の《entre deux buissons》に従いましたが、*на* を《間》の意味に解してよいかどうかについては、筆者には確信がありません。しばらく疑いを存しておきます。

Lixačev, 29, Stelleckij, 205, Gudzij 30, Obrębska-Jabłońska, 147 は *ростре на кусту* を *рострена к устью* (ないし *усту*) と読みかえて、《(Stugna が) 河口近くで幅を広げて》の意味に解していますが、少々無理のようで、punctuation をかえるだけで PA のテキストをそのまま生かした Jakobson の読みの方がこの場合ははるかにすぐれていると思われます。

「ほの暗い岸边に近い水底にとりこめた」——J *затвори днѣ при (PA Днѣпръ) темнѣ березѣ (А березѣ)*。PA *Днѣпръ* の *днѣ при* への訂正は、上の PA *князю Ростиславу* の *князя Ростислава* への訂正とともに、Vjazemskij 以来のもので、今日では La Geste のみならず、多くの研究者たちによって採用されています。Lixačev, 100 は PA の *Днѣпръ темнѣ березѣ* をそのまま生かし、これを J 198 *плачется мати Ростиславля* にかけて *на темном берегу Днепра* と訳していますが (注はなし)、文法的にまったく無理であるばかりか、Donec の銀色にかがやく岸と、泥の多い Stugna の黒々とした岸とのだれの目にもあきらかな対比を見逃している点で、粗雑の感をまぬかれません。

198. 「ロスチスラーフの母君は若き公ロスチスラーフをしのんで泣く」——J *Плачется мати Ростиславля (Р Ростиславя) по уноши князи Ростиславѣ*。年代記 Lavrentij 本 1093 年の頃の次の記事を参照：Ростислава же искавше обрѣтоша в рѣцѣ; и взявше принесоша и Киеву, и плакася по немъ мати его [Slovo のテキストとの措辞の一致に注意], и вси людье пожалиша си по немъ повелику, уности его ради [Slovo の *по уноши* と符合]。

199. 「花々は愁いにしおれ、木々は悲しんで大地に低く枝を垂れた」——J *Уныша цвѣты жалобю, и древо с(я) тугою (PA стугою) къ земли прѣклонило (А преклонило)*。(PA,) J 74 *Ничить трава жалощами, а древо с(я) тугою къ земли преклонило* と、前半は語彙が違いますが構文は同じ、後半の *древу* 以下はまったく同一です。

201. 大鶉 (*врани*) も、小鶉 (*галици*) も、かささぎ (*сорокы*) も鳴かなかつたのは、逃走者たちのありかを追手にかくすためです。Igor' 出陣のときとは打ってかわって (J 37-31 参照)、今度は Donec も、鳥たちも Igor' に好意を持ち、その逃走を助けようとします。

202. 「ただ啄木のみ、柳の枝を伝いつつ、くちばしの音高らかに河への道を教え」——J *По лозію (Р полозію) ползоша (А ползаша) толко (Р только) (PA,) дятлове — (PA なし) тектомъ путь къ рѣцѣ (А крѣцѣ) кажуть (Р кажуть)*; (PA,) *лозие* はここでは *ивняк* 《やなぎの林、やなぎの枝》の意味と解するのがいちばん穏当であると思われます (Sreznevskij, II, 44, *лозие* の項参照)。*тъкътъ* (または *тъкътъ*) 《啄木が木を》つつく音については、La Geste, 260 を参照。

203. グザー、コンチャークに言う。
204. 《かの鷹もし、巢をさして飛ぶならば、われらは黄金の矢をもって鷹の子を射殺そうぞ》
205. コンチャークグ、ザーに言う。
206. 《かの鷹もし、巢をさして飛ぶならば、われらふたりは、うるわしき乙女をもって、若鷹をつなぎとめよう》
207. グザー、コンチャークに言う。
208. 《われらもし、うるわしき乙女をもって、かの若鷹をつなぎとめなば、若鷲も、うるわしき乙女もともにわれらを逃がれ、やがてわれらがむら鳥をポーロヴェツの野にほふらん》

209. ふりし世の——ヤロスラーフの、オレークの、国のはじめの公たちの歌びと、か

なお T. Čiževska, *op. cit.*, 362 は Даль, IV, 779: токованье (=knocking of birds [この訳根拠不明]) を参考にあげていますが、それよりはむしろ同書 778: токать 《торкать, тукать, стучать, постукивать》; токанье をあげるべきでありましょう。

大鴉も、小鴉も、かささぎも鳴かないひっそりとしずまった曠野の中で、啄木のみは大きな音を立てて河のありかを Igor' たちに教えるわけです。なお N. V. Šarleman' の次の説明はきわめて適切です: В степи деревья растут только в балках — долинах речек. Издали не видно речки, спрятавшейся в ложбине, не видно и деревьев, растущих по ее берегам, однако издали слышен стук, издаваемый дятлами. Понимая значение этого признака присутствия деревьев, а следовательно, и реки, Игорь во время бегства из плена легко находил путь к воде, к зарослям, в которых можно укрыться. (Lixačev, 464 による)。

Lixačev, 464, Stelleckij 207 は РА の punctuation (сороки не трескоташа, по лозию ползоша толко, дятлове [...] кажут) をそのままとめたために、ползоша の主語を сороки と取らざるを得なくなり、しかも《сороки не ползают》(Lixačev) という矛盾に直面した結果、по лозию を、Lixačev は N. V. Šarleman' によって полозие (=полозы [Azov 海沿岸に生息する大蛇の1種]) に、Stelleckij は полозие (=поползни [鳥の名]) に改めてこれらを ползоша の主語と考えています。ともにあまり説得的とは言えせん。ことに Lixačev の полозие はいささか原作の《詩》に対する理解に欠ける所があるようです。

「夜うぐいすはたのしげに歌って [...]」—— J соловіи веселыми пѣс(нь)ми (Р пѣсьми) [...] この個所によって Slovo の作者は Igor' 逃走の時期を(おそらくは 1185 年の)晩春、ないし初夏にしていることがわかります。

203-208. polovcy の汗 Къза と Končak との対話。Lixačev, 464 も指摘するように、Ip. でも Kajaly 河畔の勝利のあと、polovcy のロシア侵攻のルートにかんして 2 人の汗の間に起こった《論争》(котора) が直接法による対話の形で語られていることは、興味ある事実です。なお J 121-122 の注参照。

204. 「かの鷹 [...] 鷹の子を [...]——J (=РА)соколь [...] соколича [...] соколь は Igor' を, соколичь は Igor' とともに polovcy の捕虜となっていた長子 Vladimir を指すこと、言うまでもありません。

206. 「われらふたりは、うるわしき乙女をもって若鷹をつなぎとめよう」—— J а въ соколца опугаевъ красною дивницею (А дѣвицею)。

208. 「若鷹も、うるわしき乙女もともにわれらを逃れ」—— J ни нама будетъ сокольца, ни нама красны дѣвице,

ここに言う《うるわしき乙女》は Končak 汗の娘で、Ip. 1187 年の項によれば Vladimir はじじつ polovey のもとに留っている間に Končak の娘と結婚し、1187 年、この妻とひとりの子供をつれてロシアへ帰りました: Тогда же приде Володимѣрь ис Половѣць с Коньчаковною и створи свадьбу Игорь сынови своему и вѣнча его и с дѣтятемь。

209. 「ふりし世の——ヤロスラーフの、オレークの、国のはじめの公たちの歌びと、かのボヤーン

のボヤーンは、スヴャトスラーフの子をも予言して、かくは歌った。

210. 《肩のなき首は辛し、されど首のなきむくろこそ悲惨のきわみ》——これぞイーゴリなきロシアのさま。

211. 空高く照る日のもと、イーゴリ公はいまぞロシアの国にあり。

212. 乙女らはドナウの岸辺に歌う。その歌声は海を越え、キエフをとよもす。

は、スヴャトスラーフの子をも予言して、かくは言った」——J Рекъ Боянъ (А,) и до сына (РА ходы на) Святъславля (А Святъ славля), (РА なし) пѣс (но) твор (е) ц (ь) (Р пѣтворца, А пѣсно творца) стараго времени (А стараговремени)—(РА なし) Ярославля, (РА なし) Ольгова, (РА なし) коганя: (РА なし) この個所は古くから注釈家たちを苦しめた有名な個所で、例えば Lihačev, 465 は、Место это настолько испорчено, что не позволяет сколько-нибудь уверенно его исправить と告白しています。拙訳は Obreńska-Jabłońska 147 が “najbardziej prawdopodobna interpretacja” として支持している La Geste, 95 の Jakobson の解釈に従いました。

Рекъ Боянъ の рекъ (<рекль) は、いわゆる完了 (perfectum) 形ですが、完了形は Jakobson の定義によれば《話し手の回顧的態度 (une attitude retrospective) を表現し》、【場合によっては】先行のコンテクストが示すそれよりも前のプロセスを示す》(C. H. van Schooneveld, A Semantic Analysis of the Old Russian Finite Preterite System, 's-Gravenhage, 1959, p. 87 による) 時制であり、彼はこの見方に立って、J 209 の рекъ Боянъ は《Воjan が (予言して) 言った》意味であると解しています (La Geste, 95)。Jakobson は、РА の ходы на Святъславля の до сына Святъславля への訂正について、Slovo の表題の Игоря сына Святъславля を参考にあげていますが、J 210 の《хоти》から《кромѣ головы》まではほかならぬ Igor' にかんする Воjan の《予言》であるというこの認識もまた、この訂正の根拠のひとつになっているものと思われまゝ。

生格形 времени にかかる三つの所有形容詞 Ярославля, Ольгова, коганя のもとの名詞については、Ярославъ は Jaroslav Vladimirovič (“Mudryj”) (J 5 参照) を、Ольгъ は Oleg Svjatoslavič (“Gorislavič”) (J 57 参照) をそれぞれ指すものでしょう。また когань/каганъ は元來 avary および hazary の最高主権者を意味した古い Altaic title ですが、X 世紀から XI 世紀までは、ロシアの公にかんしても用いられたことがよ知られています (M. Vasmer, *op. cit.*, I, 499-500, K. H. Menges, *op. cit.*, 32 以下参照)。

Nahtigal, 60, 94-95 はこの個所の Р のテキストを、Рекль Боянъ на исходы на Святъславль, пѣснотворьця [Nahtigal によれば N. sg.] старого веремене Ярославля, Ольгова коганя: と読み、《Jaroslav や、Oleg 公の (Olegovega kanovega) 古い時代の歌い手 Воjan は Stjatoslav の終焉について [次のように] 言った》と訳しています。なお Nahtigal は、Svjatoslav はここでは Oleg の父 (J 57 参照), Roman の父 (J 5 参照) で、Jaroslav Vladimirovič の子にあたる Svjatoslav († 1076) を指すと言います。魅力ある説ではありますが、この説の難点は、исходы の単数 исходъ には《кончина》の意味があるにせよ (Sreznevskij, I, 1163 参照), plurale tantum としての用例が他に見当たらないことでありまゝ。さらにまた、Р の Ольгова коганя をコンマで切らずに Olegovega kanovega と訳すことはおそらく無理でありまゝ。なぜなら古代ロシア語では、例えば《Oleg 公の時代の》なら《Oleg 公》を名詞生格にして врѣмене (ないし веремене) Ольга когана と書くのがふつうで、所有形容詞を二つ重ねて Ольгова коганя と書くことはまずないはずだからです (J 57 были плъци Олговы, Ольга Святъславличя 参照)。

212. 「乙女らはドナウの岸辺に歌う。その歌声は海を越え、キエフをとよもす」——J Дѣвици поютъ на Дунаи, (РА.) вьются голоси чресъ (Р чрезъ) море до Кіева. (А,) Stelleckij, 212 はこの個所の Дунаи は Dnepr を指すものと取っていますが、そうすると Dnepr のほとりで歌う乙女たちの歌声がなぜ《海 (おそらくは黒海) を越えて》キエフに達するのかわからなくなります。この Дунаи はやり文字どおりの意味でありまゝ。そう取らなければ作者一流の壮大な地理学的 hyperbole (例えば J 29 参照) の面白さは理解されないと思います。つまり作者は、ロシアの遠い辺境の人々までが Igor' の帰還を喜び迎えたと言いたいのです。なおここに Kiev の名が出てくるのは、諸公が Kiev の公を中心として力を結集する以外にロシアの生きる道はない、という作者の信念 (J 88 への注参照) からすれば当然のことです。つまり Kiev は作者にとってはロシア統一のシンボルにはかならないわけでは

213. イーゴリは、「塔」の聖母の御堂をさして、馬上ゆたかにポリチェフ坂を登り行く。
214. 国々はよろこび祝い、町々は笑いさざめく。
215. いにしえの公たちのほめ歌をうたったからは、年若き公たちにも歌をささげまつろう。
216. スヴァトスラーフの子、イーゴリに、荒れ牛フセーヴォロトに、イーゴリの子ヴラジーミルに、ほまれあれ！
217. キリストの教え守る国たみのため、異教の勢と戦う公たち、従士ら、すこやかにあれ！
218. 公たちにほまれあれ、従士らにいさおしあれ！

213. 「イーゴリは《塔》の聖母の御堂をさして、馬上ゆたかにポリチェフ坂を登り行く」——J Игорь ъдетъ по Боричеву къ святѣи Богородици (А .) Пирогощей. (А なし) Боричевъ は Днепр の埠頭から Kiev の中心部へ通ずる坂の名で、例えば Брокгауз-Ефрон, Энцикл. словарь, т. 29, 1895 所載の Kiev の地図にも, Боричев взвоз の名で出ています。Богородиця Пирогоща は 1132 年に Vladimir Monomach の子 Mstislav が造営した教会で、ここに Constantinople から請来された同名の聖母像が安置してあった模様です。Пирогоща はギリシア語 purgiōtissa 《塔の》, ないしは purgōtissa 《守りを強くする》のなまった形と考えられています (M. Szeftel, La Geste, 147 以下による)。

Ip. によれば Igor' は polovcy の陣営を脱出して以来、11日を費して Donec の町にたどりつき、そこから (当然のことながら) 自己の居城のある Novgorod-Severskij へ行き、ついで兄弟 Jaroslav のいる Černigov へ行き、そこからはじめて大公 Svjatoslav のいる Kiev へ行ったことになっていますが, Slovo では Donec (町), Novgorod, Černigov の名はいずれも省略され、あたかも Igor' が直接 Kiev へ帰ったように描いています。これまた J 212 とともに Kiev の政治的意義を読者に強く印象づけようとする作者の意図のあらわれでありましょう。

214. 「国々はよろこび祝い」——J страны ради (А страны ради) Ip. でも Igor' は各地でよろこび迎えられたことが強調されています: [Novgorod-Severskij で] [...] обрадовашася ему [...] Ярославъ же обрадовася ему [...] и радъ бысть ему Святославъ, также и Рюрикъ свать его.

218. 「公たちにほまれあれ、従士らにいさおしあれ」——J Княземъ слава, а дружинѣ (А а дружинѣ) честь (РА Аминь)! (РА .) Аминь 《アーメン》は宗教的内容を持つ古代ロシア文献の末尾にしばしば用いられる語ですから, РА の а дружине Аминь が意味をなさないことはたしかです。そこである注釈家たち (たとえば Lixačev, Gudzij, Stelleckij) は Князем слава а дружинѣ と読んで, 《Князьям слава и дружине》と訳していますが, La Geste, 96 は接続詞 а はロシア語では同質の項をまとめるには決して使われないという理由でこの解釈をしりぞけ, J 25, 36 ищучи себѣ чти [=чести], а князю славы [J 25 では славъ] にもとづき а дружинѣ のあとに元来あった честь がある時点で Аминь に書き改められたものと考えています。Nahtigal, 96 も同様です。